

説教要旨

I テサロニケ 1:1-3

「福音に立つ」

北海道聖書学院 本科3年 平吹光太

導入：なぜテサロニケの人達が激しい迫害を受けてもおも福音に立つことができたのか？ <証>

背景：なぜこの手紙が書かれたのか。この手紙を書いたのはパウロ、第二回伝道旅行の途中のコリント滞在中にこの手紙を書いている（使徒18:1）。テサロニケ教会は、第二回伝道旅行の時に何人かのユダヤ人と神を敬う大勢のギリシャ人たちがパウロの伝道によって救いに導かれた者たちであった（使徒17:1-4）。信じた者たちの多くはギリシャ人たち、つまり異邦人中心で、そのため、ユダヤ人たちは、ねたみに駆られ、そしてパウロはユダヤ人たちによって激しい迫害があった。<証>

パウロは約3週間の短い伝道活動でテサロニケを去らざるを得なかった。テサロニケのクリスチャンは、十分に教えられることもなく、最初から迫害の中に置かれた（使徒17:5-9、Iテサ2:14-15）。彼らを気がかりであったパウロはもう一度テサロニケに戻り、信仰に堅く立つように励まし、教えることを願ったが、ユダヤ人の迫害の激しさの中で、訪問が叶わなかった（Iテサ2:17-18）。激しいユダヤ人による迫害の中で、若い彼らの信仰が心配であったパウロは、テサロニケの様子を知ることと励ましのために、パウロはアテネからテサロニケにテモテを遣わした（Iテサ3:2-5）。テモテは、テサロニケ教会の人々が困難な状況の中でも福音に堅く立っていることと、彼らの必要をパウロに報告をしている（Iテサ3:6）。それは、再臨についての教えが不足し、その終末に対する誤った考えによって混乱している者たちがいるために福音の基本的教えを彼らに伝えることと、迫害で苦しんでいるこの若いテサロニケの教会を励ますために、パウロはこのテサロニケの手紙を書いている。

I 「父なる神と主イエス・キリストにある教会」

1節、「パウロ、シルワノ、テモテから、父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。恵みと平安があなたがたにありますように。」と、パウロはあいさつから手紙を書き始めている。シルワノというのは、シラスのことで、彼の正式名称。

1節に「父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会」とある。簡単に「テサロニケの教会へ」だけではなく、わざわざ「父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会」とパウロは書いている。これは何を意味しているか？それは、主の導きで、パウロたちによって教会が開拓されて建て上げられたが、パウロたちの教会ではなく、父なる神と主イエス・キリストにある教会であるということ。つまり、教会員一人ひとりが父なる神と主イエス・キリストとの関係に結ばれており、教会は神と主のもの、キリストの体、神様ご自身を現される場所であるということ。激しい迫害の中でもテサロニケの人々が、信仰に生きることができたのは、教会のために長年頑張ってきた努力であったり、また、あの人々が教会に来ているから来るものではなく、イエス・キリストの命がけの贖いによって、神様との関係が回復された、その喜びと感謝の中に生きていたから。教会に来ている動機、信仰生活の動機がよく分からなくなったことはないでしょうか？<証>

テサロニケ教会が、信仰に固く立って歩むことができたのは、滅びるに過ぎない私たちを命がけで愛してくださった神様との関係の中で喜びと感謝を持っていたから。私たちもいつもその喜びと感謝を持たせて頂きながら、信仰生活を歩ませて頂こう。

II 「信仰、愛、望みを父なる神に土台を置く」

2節ではテサロニケの人たちへの祈りについて述べている。2節をお読み致します。「私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。」パウロはテサロニケの人たちのことを覚えて祈る時、いつも神に感謝をしていると書かれており、その感謝の理由が3節。「私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」

パウロのことばには「信仰、愛、望み」という有名なことばが使われている。私たちが、すぐに気づくことばは、パウロのコリント人への手紙第一13章13節。「いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。」とコリント人への手紙では、愛を強調している。それは、コリントの教会では、愛が強調されて語られる必要があったから。しかし、パウロは、このテサロニケの人たちに対して、信仰、愛、希望の順で書いており、最後に述べている希望に強調点を置いて書いている。それは、テサロニケの教会に

とって希望について特に語られる必要があったから。

- ① 「信仰から出た働き」とは、イエス・キリストによる救いに与かった喜びと感謝からわきあがる思いに伴って出てくる働き。〈証〉
救いは信じる信仰によるものであり、決して行いによるものではない。そうではなく、永遠の滅びに向かうべきであった者が、イエス・キリストの十字架の贖いによって救い出してくれたことへの喜びと感謝からくる応答が、キリスト者とされた者は自然に伴ってくる、それが、「信仰から出た働き」ということ。テサロニケの人たちの信仰に、喜びと感謝からくる応答の働きがあったということ。
- ② 「愛から生まれた労苦」とは、イエス・キリストの十字架に現された愛、報いを求めずに与え続ける神の愛。つまり愛には労苦があるということ。父なる神様が、一人子なるイエス様をこの世界に与え、その御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を持たせるために愛を現されたにも関わらず、人はこの方を受け入れないばかりか、裏切り、恩を仇で返すように生きてきたのである。しかし、神様は、諦めることなく、私たちが神様に立ち返るように忍耐をもって常に待っておられる愛なるお方。〈ペテロについて〉私たちは、そのキリストの愛を知り救われた私たちは、この世での見返りがなくても、キリストの愛で人を愛していくことができる。テサロニケの人たちはこのキリストの愛によって人をも愛し、神様に仕えることができていた。
- ③ 「主イエス・キリストに対する望み」とは、主イエス・キリストの再臨の希望。今日の箇所の上に後の4章16-17節に、その再臨の希望についてパウロが述べている。イエス様が再臨される時、キリストにある死者がよみがえり、そして、生き残っているキリスト者が引き上げられ、空中で主と会い、そして、いつまでも主と共にいることになる。これが私たちキリスト者の信じる希望。「イエス様が再臨される時、朽ちないものによみがえらされ、栄光の体、御霊のからだによみがえらされるのです」(1コリント15:42-44)。今の体は歳を重ねる毎に着実に衰え、体の老化を感じ、できないことが増える。確実に今の体は死に向かう。しかし、イエス様が再臨される時、病気も無く、罪を犯すこともない、朽ちない栄光の体によみがえらせて頂ける。苦しみや悲しみ、問題からも解放されるという希望を、神様は約束している。なんと素晴らしい希望。だから私たちは、この世での苦難が起こっても、この希望を胸に固く信仰に立たせていただくことができる。3節「主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を」とあります。「望みに支えられた忍耐を」とあるように、私たちは忍耐を持って、いつ来られるか分からないイエス様を待ち望みましょう。

テサロニケの人たちは、救われてから一ヶ月にも満たない学びと訓練期間しかない中で、すぐに激しい迫害の中に置かれた。それでも、なおも彼らが主を見上げて歩み続けることができたのは、イエス・キリストによる救いに与かった喜びと感謝からわきあがる信仰、イエス・キリストの十字架に現された愛、また報いを求めずに与え続ける神の愛、そして、主イエス・キリストの再臨の希望があったから。この信仰と愛と希望に生きていた故に、迫害にも負けず、さらに1章7節に書かれているように、信者の模範になる程にこの福音に生きている。

このテサロニケ人への手紙の中で何度もこのイエス・キリストの再臨の希望をパウロは語っている。それはなぜか？それはテサロニケの人たちが誤った再臨理解をしていたことと、そしてそれ以上に、迫害の苦難の中にいるテサロニケのキリスト者にとって、イエス・キリストの再臨こそが本当の慰めであり、励ましである希望を伝えたかったから。このことをパウロはここで強調して語っているということ。〈証〉

結論：テサロニケの人たちは、クリスチャンになったばかりですぐに、激しい迫害にあった。それでも信仰に固く立つことができたのはなぜか？それは、この福音に心から生きていたから。私たちはこの福音に本当に生きているか？私は、いつも十字架の恵みに生きているか？私は、裏切られてもなおも愛して下さる主の愛に生き、人に仕え愛しているか？私は、この世の楽しみや欲の中にもっといたいと思うよりも、イエス様が再び来られ、朽ちない栄光の体に変えられる望みを抱いて歩んでいるか？今日神様はここにいるお一人おひとりに、“わたしが命がけで与えたこの福音に生きてほしいと願っておられる。この福音にいつも生きることができるようにさせてくださいと、神様により頼みながら生きていく者とされてまいりましょう。